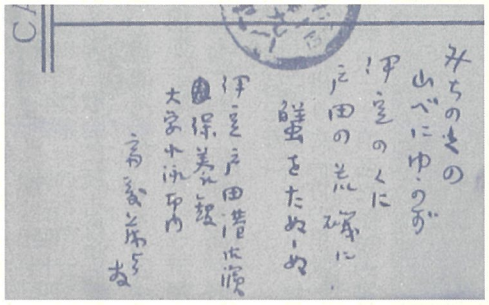
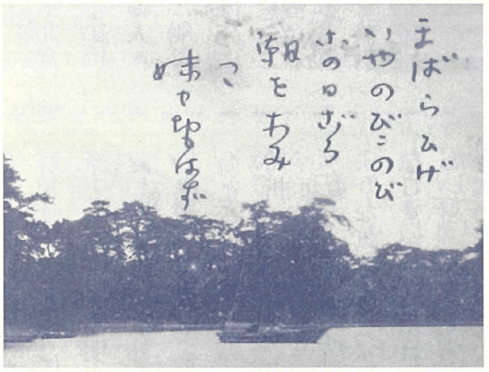
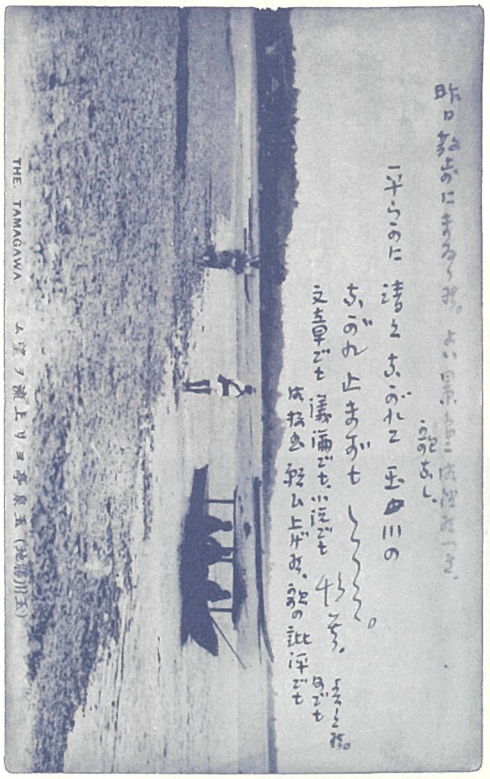
館報「茂吉記念館だより－生誕140年記念－」第25号■発行／令和4（2022）年12月15日■発行人／秋葉四郎 ■編集・発行／公益財団法人斎藤茂吉記念館〒999-3101 山形県上山市北町字弁天1421 URL https://www.mokichi.or.jp tel.023-672-7227 fax.023-672-2626

Vol.25 2022.12.15
茂吉記念館だより－生誕140年記念－







斎藤茂吉渡辺幸造宛書簡 上から明治40年8月9日表面と裏面（部分）、明治41年10月6日

目次

・寄稿／ さいとうなおこ 田螺とマリアと、子規 2-3
・寄稿／ 永田和宏 茂吉にもあった楽観性バイアス 4-5
・寄稿／ 布宮雅昭 人々の心に生きる斎藤茂吉 6-7
・館長随筆 8-9
・斎藤茂吉の遺骨・埋骨式について（報告）10-11
・定例歌会概要・新型コロナウイルス対策 12
・収蔵資料から －渡辺幸造宛書簡－ 13
・短信（掲示板）・友の会入会／活動支援募金のご案内 14

田螺とマリアと、子規

さいとうなおこ

長き夜や千年の後を考へる　正岡子規『寒山落木』

日清戦争に従軍記者として行った翌年、結核が悪化し、明治二十九年三月に脊椎カリエスとの診断がくだった。短い命がもっと短くなったことを知った年の句である。子規の頭の中の時間を思いながら、秋の日、子規庵のガラス戸越しに棚の糸瓜や鶏頭の色や空を眺めていると、時間の流れが緩やかになり、千年の後の宇宙から遠眼鏡で子規庵の小さな庭の紅い鶏頭を覗いているような気分になる。

明治十五年に生れた斎藤茂吉の生誕一四〇年の今年は、正岡子規没後一二〇年にあたる。明治の前年、慶応三年に生まれた子規は、三十五年に三十四歳十一か月で亡くなった。二十歳であった茂吉は、まだ子規を知らない。だが九年後、明治四十四年九月十八日、子規庵での十周忌歌会に茂吉は伊藤左千夫、平福百穂、森田義郎、蕨真その他「アララギ」の人々に混じって土屋文明と共に居た。

なみだ落ちて懐しむかもこの室にいにしへ人は死に給ひにし（「子規十周忌三首」）　『赤光』

二十二歳の冬、貸本屋で借りた『竹の里歌』に感動してより七年、「病牀六尺」で有名な子規の書斎兼病室の六帖、「この室」にようやく坐ったのである。師の左千夫や子規に接していた人々の話を聞くうちに、子規の死が身近に感じられ、思わず涙が零れた。子規が生きていて、自分の歌を見事に模倣した「地獄極楽図」一連を読んだなら、さぞ愉快に思ったであろう。「千年の後」の句ではないが、理屈抜きに遠い世界へ運んでいってくれる茂吉の歌が私には二つある。

とほき世のかりようびんがのわたくし児田螺はぬるきみづ恋ひにけり　『赤光』

生涯学習の通信講座に勤めていた昔、学園の理事長が突然隣の椅子に座って、「さいとうさん、教えてほしい歌があるんだけど」と、にこっと笑った。そしておもむろに呪文のように朗誦された。

トホキヨノカリヨウビンガノワタクシゴタニシハヌルキミヅコヒニケリ

はっきりと、二度。一瞬、頭がまっ白になった。私の解釈は、はるか昔に極楽浄土の鳥、迦陵頻伽が産み落とした父親不明の子どもは「田螺」であったので、麗しい親に似ないゆえ、天界から下界に降ろされたという勝手なものである。「ぬるきみづ」は田んぼの水の温とさであろうが、母の胎内の羊水を思ったりもした。時折、「トホキヨノカリヨウビンガノ…」が頭の中でホロホロ鳴る度に、ふしぎな絵草紙の世界に引き込まれるような気分になった。理事長にとっても多忙で実務的な日常から、非日常へ飛べる呪文の役目をこの歌は果たしていたのかもしれない。

とほき世のかりようびんがのわたくし児田螺はぬるきみづ恋ひにけり　『赤光』

田螺はも背戸の円田にゐると鳴かねどころりころりと幾つもゐるも

わらくずのよごれて散れる水無田に田螺の殻は白くなりけり

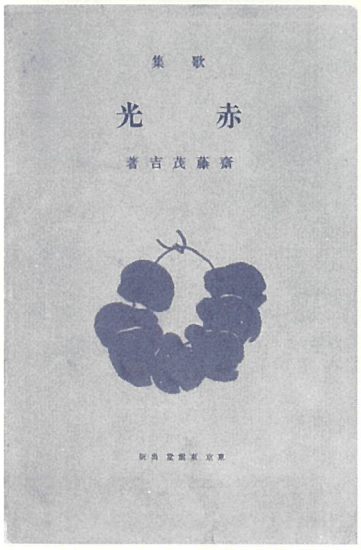
気ちがひの面まもりてたまさかは田螺も食べてよるいねにけり

赤いろの蓮まろ葉の浮けるとき田螺はのどにみごもりぬらし

味噌うづの田螺たうべて酒のめば我が咽喉仏うれしがり鳴る

南蛮の男かなしと恋ひ生みし田螺にほとけの性ともしかり

その頃読んでいた岩波文庫『斎藤茂吉歌集』（昭和四十八年版）に、右の一連のうち一、三、五首目の歌



初版『赤光』（大正２年東雲堂書店）

が載っていたのでさらに続きを空想した。地上に降ろされた田螺は無事に育ち、赤い小さな蓮の葉が浮く田の中でのんびり子を身ごもったのだと。茂吉が改選版で田螺の父親、「南蛮の男」の歌を削ったと知ったのはずっと後のことである。

関連があるのかないのか。子規の田螺の句を少し引いてみる。「田螺鳴く」は、春の季語である。

売られてや京の真中に鳴く田螺　明治二十六年
鶴下りて背戸の田螺をあさりける　二十七年
塵塚や烏のつゝく田螺殻　二十八年
小山田や田螺啼き出す雲の中　〃
ころがりて住む世の中や田の田螺　二十九年

子規繋がりで言えば、子規が明治三十二年に「ホトトギス」に書いた「俳句新派の傾向」の中に、「泥の精星と契りて田螺を生む」が載っている。作者は歌原蒼苔。子規の母方の親族である。発想は似ているが、一句が全部説明なので面白くない。子規を尊敬する茂吉のことだ。隅々まで読んでいて知っていたであろう。

とほき彼方の壁の上にはくれなゐの衣を著たるマリア・マグダレナ　『寒雲』

迦陵頻伽の上半身は美しい女性、下半身は鳥で仏典にもあるが、こちらは聖書の女性である。

この歌も私の頭の中に棲み着いたのは三十代である。「かりようびんが」と同じくらい長い。ドイツに留学中の歌だと思い込んでいたので五十五歳の作だと知ったときは驚いた。「木芽」の連作、山上で過ごす静かな歌とは何も関連性がないからだ。十四首の八首目、「マリア・マグダレナ」の前に次の歌がある。

のぼり来し山の一夜のまなかひにまぼろし見つつ吾は眠らむ　『寒雲』

九首目も、「北平の城壁くぐりながながと駱駝の連はあゆみそめ居り」なので、一夜の夢だと読める。しかし、私が最初に手にした文庫の『斎藤茂吉歌集』に手がかりとなるこの歌は入っていなかった。従って、「マリア・マグダレナ」は、ひょんと単独で脳裏に定着した。透明な滴のように、清らかな音楽のように。

『斎藤茂吉―その迷宮に遊ぶ』の「茂吉と性」の中で岡井隆はこの歌をあげ、「茂吉はよく聖女を歌っています。ジオット作の『マグダラのマリア』は、イタリアに行ったときに見ている。マグダラのマリアは、キリストの恋人と言ってもいい人で、非常に清らかに描かれているんですが、茂吉はどうしても忘れられないんですね。こういう人と、阿部定と、茂吉の中ではほとんど同じレベルのところにあったというのが、面白い」と話している。成程。若い頃は「清らか」だけを自分の好みに合わせて感受していたのかもしれない。

聖書には六人のマリアが登場する。その中で最も個性的であるマグダラのマリアは、『聖書の女性　新約篇』（アブラハム・カイパー著）によると、きわめて情熱的、衝動的な性格であったと紹介されている。

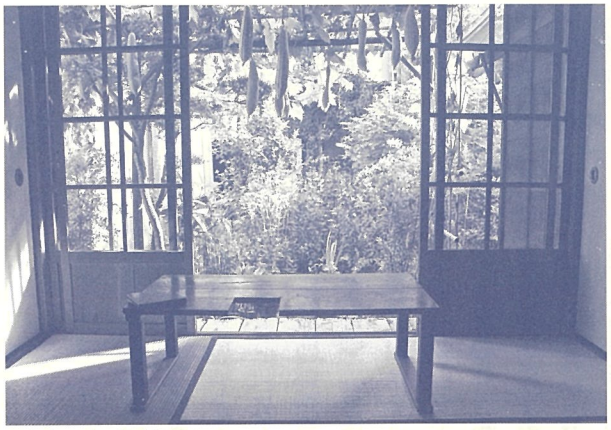
無鉄砲にも子規との関わりを思うとき、「ホトトギス」（明治三十二年）に載った「夢」と題した一篇が胸をかすめた。

○先日徹夜をして翌晩は近頃にない安眠をした。其夜の夢にある岡の上に枝垂桜が一面に咲いてゐて其枝が動くと赤い花びらが粉雪の様に細かくなつて降つて来る。其下で美人と袖ふれ合ふた夢を見た。病人の柄にもない艶な夢を見たものだ。

五十五歳の茂吉と三十一歳の子規に起こったある夜の「柄にもない艶な」まぼろし、夢。「赤」「くれなゐ」への愛の深さは共に限りない。

直接会うことはかなわなかった二人の歴史と創作の重なりのひとかけら、「長き夜」に思ったことだ。

■斎藤直子　歌人・「未来」・一般財団法人子規庵保存会理事長


子規庵の庭（筆者提供）

茂吉にもあった楽観性バイアス

永田　和宏

新型コロナウイルスの蔓延が依然として続いており、発生からすでに三年になるが、専門家によれば、さらに第八波が世界的にも流行の兆しをみせているとのことで、予断を許さない。まさにパンデミック（世界的感染爆発）であるが、この前のパンデミックと言えば、大正七～九（一九一八～二〇）年にかけて大流行をしたスペイン風邪があげられる。

当時の世界の人口は十八億人ほどであったが、三分の一の六億人が感染したと言われ、死者は少なくとも四千万人。これは情報不足などによる過小評価の可能性があり、実際には五千万人以上が亡くなったという推計もある。わが国の人口は五五〇〇万人くらいであったが、二三八〇万人が感染し、三八～四五万人が亡くなったと言われる。

さすがに医学の進歩によって、現在では死亡率は遥かに小さな値になっているが、今回の新型コロナ感染でも、総感染者数は世界で六億人を越え、死者数も六百万人を越えてしまった。スペイン風邪は第三波まで、三年で終息したが、今回の新型コロナがいつ終息するのかについては、専門家にも予想できていないようである。

スペイン風邪は、今となってはインフルエンザ、それもH1N1型であることがわかっているが、インフルエンザの流行は何もスペイン風邪が初めてではなく、わが国でも平安時代に完成した「三代実録」にはすでに「しはぶき（咳逆）」の言葉が出ており、インフルエンザであったと考えられている。加藤茂孝氏の『人類と感染症の歴史』（丸善出版）によれば、奈良時代の山上憶良の「貧窮問答歌」に、「寒くしあれば堅塩を取りつづしろひ糟湯酒うち啜ろいて咳かひ鼻びしびしに」の一節があるが、この「咳かひ鼻びしびしに」は、インフルエンザの症状であった可能性もあると記されている。

加藤氏はさらに、「源氏物語」で六条御息所に呪い殺された夕顔は、呪いによってではなく、インフルエンザ（しはぶき疫）で亡くなったのではないかと想像をたくましくしている。夕顔のうわごとは、呪いによるものではなく、高熱、脳炎・脳症に幻覚よるものではないかと言うのである。それが光源氏にも感染し、夕顔の没後同じ症状を呈し、「この暁よりはしはぶきやみに候らん、かしらいと痛くて苦しくはべれば」と源氏自らが語っていると指摘している。これはあくまで物語のなかのことであるからそれはともあれ、紫式部の時代の天皇であった一条天皇も藤原道長も「しはぶき」、すなわちインフルエンザで亡くなっている。かくも古き時代から、人々は「はやり病（伝染病）」との戦いを強いられてきたのである。

さて、大正になって大流行をした「はやりかぜ」（スペイン風邪）は、最初、相撲風邪などと言われ、台湾巡業から帰った力士たちが次々に感染して、場所が開けなくなったことからこう呼ばれていた。この「はやりかぜ」には芥川龍之介、志賀直哉、菊池寛、与謝野晶子など、当時の文豪と呼ばれる人たちも軒並み感染していた。そして、わが斎藤茂吉も例外ではなかった。

茂吉は大正六年十二月、長崎医学専門学校の教授となり、また県立長崎病院の精神科部長として、長崎に赴任していた。「はやりかぜ」の流行は、茂吉の居た長崎も例外ではなかった。歌集『つゆじも』の大正八年の歌は次の三首で終わっている。

十二月三十日。十一月なかば妻、茂太を伴ひて東京より来る。今夕二人と共に大浦長崎ホテルを訪ふ

四歳の茂太をつれて大浦の洋食くひに今宵は来たり

はやり風はげしくなりし長崎の夜寒をわが子外に行かしめず

寒き雨まれまれに降りはやりかぜ衰へぬ長崎の年暮れむとす

茂吉の歌に「はやりかぜ」があらわれるのは、これらの歌からである。茂吉は医師であるから、「はやりかぜ」の怖しさは当然よく認識していたはずで、「はやりかぜ衰へぬ長崎」にあっては「わが子外に行かしめず」という正しい予防対策を取っていたのである。にもかかわらず、せっかく東京からやってきた輝子と「四歳の茂太をつれて大浦の洋食」を食いに出掛けたりもする。このあたりの不徹底は、決して茂吉だけが責められるべきものではなく、誰にでもある心の傾きなのだということ

とに注意を向けておきたい。

案の定、翌年、大正九年に詠まれた最初の歌は、

はやりかぜ一年(ひとせ)おそれ過ぎ来しが吾は臥(こや)りて現(うつつ)ともなし

ということになった。この一首には「一月六日。東京より弟西洋来る。妻・茂太等と共に大浦なる長崎ホテルにて晩餐を共にせりしが、予夜半より発熱、臥床をつづく」なる詞書がある。

実際茂吉の病状は予断を許さないものであった。「吾は臥りて現ともなし」は決して誇張ではなく、肺炎を併発し、四五日はまさに生死の境をさまよったのである。因みにほぼ同時期に感染した長崎医専の二人の教授（大西進と尾中守三）は、この感染で亡くなっている。同時に感染した輝子と茂太は、どちらも症状が軽くすぐに回復したが、茂吉は二月十四日まで病床にあり、本復までには五〇日余りを要したようだ。

ここに見られるように、何か大きな事件や疫病、災害などが起こった場合、これは大変だと皆が思う。そう思いつつ、「しかしまあ自分はたぶん大丈夫だろう」と思う性癖が誰にも少なからずあるものである。これを「正常性バイアス」と言ったり、「楽観性バイアス」と言ったりもする。

まさに、この時の茂吉にはこのバイアスがかかっていたのである。新型コロナでもそうであるように、感染症蔓延時には人が集まるところへは行かないこと、ましてそこで飲食をしないことは茂吉には当然分かっていたはずなのであるが、まあたぶん大丈夫だろうとホテルでの食事に臨んだのだろう。一回目の輝子と茂太を連れての会食が大丈夫だったから、その一週間後、西洋が来たときにも、この前が大丈夫だったから、今度もたぶん大丈夫と、同じホテルに繰り出しのである。典型的な楽観性バイアスの発露である。自らを省みれば、誰にもこのような思考傾向はあるのであり、災害時に被害を大きくする大きな要素は、この楽観性（正常性）バイアスにあると言われている。

今回のコロナ禍でも、新聞歌壇には早い時期からコロナの歌が溢れるように載ることになったが、私が印象に残っている何首かのなかに同じ週に採った二首があった。

最後までコントか本当か分からない手品のように消えたおじさん　　澤田佳世子

ウイルスの世界中の広まりに自分だけはないと考えている　　高橋健興

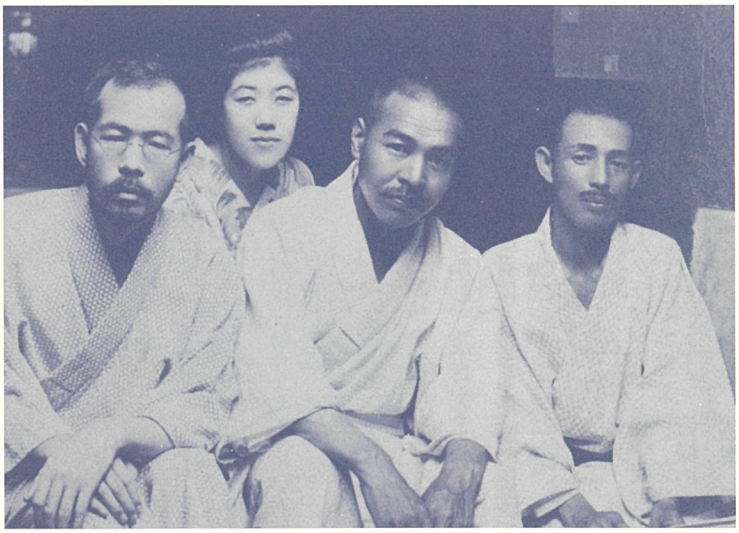
※二首ともに朝日歌壇 2020.4.26

これらの歌が作られた三月下旬、新型コロナウイルス感染は、何か大変そうだという一般的な理解は社会に広がりつつあったが、国民がこれは容易ならざる事態なのに違いないと〈体感〉したのが、志村けんの突然の感染死であったと私は思っている。どこか余所の出来事と思っていたものが、にわかに自分に迫ってきていると誰もが体感したのが、志村けんの死の意味であっただろう。

たまたま同じ日に採った高橋の一首は、より直截に楽観性バイアスを詠っている。百年前の茂吉も、百年後の私たちも、共に、自分だけはと、自らを蚊帳の外に置きたがる傾向は同じであり、どこか普遍的にあって、変わらない人間の性向なのであるのかも知れない。

この時、茂吉が同じ「はやりかぜ」に罹った芥川龍之介、杉浦翠子、鈴木三重吉などに、自らの病状とともに見舞いを送っている手紙などもずいぶんおもしろいものなのだが、紹介するには紙幅を使い過ぎてしまった。また別の機会にすることにしておきたい。

■ながた かずひろ　歌人・「塔」・JT生命誌研究館館長



長崎雲仙に療養中の茂吉を赤彦らが見舞った折（左から茂吉、妻輝子、島木赤彦、土橋青村　大正9年）

人々の心に生きる斎藤茂吉

布宮　雅昭

山形県歌人クラブは、斎藤茂吉の顕彰事業（斎藤茂吉記念全国大会・斎藤茂吉ジュニア短歌コンクール・茂吉忌合同歌会）に後援、主催の一員、短歌の選考など様々な形で参画してまいりました。このたび、この「茂吉記念館だより」が創刊四半世紀となる二十五号の節目をむかえ、斎藤茂吉生誕一四〇年を記念する特別号として発行されるにあたり、山形県歌人クラブの行っている斎藤茂吉の顕彰事業への関わりと、斎藤茂吉記念歌集に寄せられた斎藤茂吉にまつわる短歌についてご紹介したいと思います。

斎藤茂吉記念全国大会の折には斎藤茂吉記念歌集を発行していますが、今年で四十八集となった。県歌人クラブとしても会員の皆様に応募への積極的な働きかけを行ってきているところであります。応募者数をみてみると、一時二千人を超えていたのが年々減少してきて五百人を切るまでになった。これは、短歌人口の減少と呼応しているのであろう。それでもここ数年は、すこしづつ応募者数が増えてきて、五百人を超えるようになってきている。これは、記念館による働きかけによるところが大きいと思うが、うれしくまた力強く感じている。

斎藤茂吉ジュニア短歌コンクールは、平成十四年の斎藤茂吉生誕一二〇周年記念として発刊された「児童生徒作品集」を前身として、翌年の没後五十周年となる平成十五年から始まった事業である。県内外を問わず小・中・高等学校に呼びかけ短歌を募集している。その中から入選作品二百首が記念歌集「斎藤茂吉ジュニア短歌コンクール入選作品集　桜実(Sakurago)」に掲載されている。こちらの方は、応募作品が多くなっている。令和三年度は第十九回目のジュニア短歌コンクールとなり、全国の小・中・高等学校合わせて一四三校から一一〇七九首の作品が寄せられた。一万首をこえる数の作品が寄せられていることは驚きである。もちろん先生方のご協力あってのことであるが、うれしい限りである。生徒数が減っている中で、応募数が一万にのぼり、ここ数年変わっていないようである。学校教育において、短歌をつくることの大切さを認識されてのことと頼もしく思う次第である。我々県歌人クラブもこの一次選考に協力している。そして、我々も若い人たちの率直で初々しい感性の歌を読ませていただくと、元気な力をもらえるようでうれしくなる。若く素直な言葉というのは力があるものである。こういう人たちの中から、将来の短歌文化を背負っていく人たちが育ってくれればと思う次第である。そう考えると、この事業は短歌にとりとても大切なことである。

茂吉忌合同歌会は、今年で五十五回記念歌会であった。しかし、コロナ禍により昨年につづき紙上歌会となってしまった。「新アララギ」の雁部貞夫氏の講演も中止となってしまったのは残念であった。講演内容は文章にして投稿者に配布された。茂吉忌歌会も以前は、三友エンジニア体育文化センター（上山市体育文化センター）内で選者ごとの分化会として三会場に別れての開催であったが、参加者の減少により、五十三回目から茂吉記念館内の一つの会場で行うようになった。山形県内の短歌愛好者の減少と高齢化を思えば止むを得ないことと思う。しかし、茂吉記念館で歌会を開けるということは、参加者にとっても最適の場所での歌会と思う。参加者はついでに展示物も見学できる。今後共、会を継続していきたいものである。

このように、県歌人クラブとして斎藤茂吉の顕彰事業に関わらせていただいていると、皆様の斎藤茂吉への様々な思いに触れることができ、感謝している。今ここに令和元年の記念全国大会の際に発行された第四十五集記念歌集がある。改めてこの歌集を読み、茂吉先生と関わり深い歌を鑑賞してみたい。

夫とわれともどもに来て虹が丘茂吉の歌碑を声高くよむ　　山形県　飯田　節子

戦後、斎藤茂吉が過ごした山形県大石田町の虹が丘には、「最上川の上空にしてのこれるは未だうつくしき虹の断片」という歌碑が立っている。ここからは茂吉の愛した最上川の流れが真下に望める。作者は旦那様と訪れ、この歌碑を声高く読んだという。

この次は茂吉記念館との願ひ果たせず逝けり車椅子の兄　山形県　大木喜久子

この次は茂吉記念館を訪ねてみたいというお兄さんの願いが叶わなかったという。さぞかし心残りであったことだろう。

建立にかかはり深き茂吉歌碑折りをりに来て声あげて詠む　秋田県　大山　文穂

作者は、田沢湖の茂吉歌碑建立に関わった。平成十年湖畔に、「行々子むらがりて住む小谷をも吾等は過ぎて湖へちかづく」という歌の外十首が並べて碑に刻まれている。

去年より吾の継ぎたる「茂吉を語る会」人々来たれ共に語らむ　東京都　雁部　貞夫

これまでにも斎藤茂吉について多くの著作物があり、そして多くことが語られてきた。それでもまだ語りつくせないものがあるのである。それだけ斎藤茂吉は、不可思議な魅力に満ちているのである。

雪降るなか最上川の流れの青き写真壁に掛けて五十年色褪せてきぬ　大分県　佐藤　嘉一

雪ふるなかの最上川の写真を壁にかけて五十年がたつという。色褪せてきた写真を思うと、茂吉を最上川を偲ぶ真摯な心とその深さが伝わる。

背表紙の破れし歌集『つゆじも』を母の遠忌の行李にみつく　埼玉県　高原みさ子

『つゆじも』は、斎藤茂吉の第三歌集である。作者のお母さんは、茂吉の歌を大変愛読していたのであろう。「背表紙の破れし」にそれが表れている。たぶん、短歌も詠んでいたのだと思う。

茂吉詠みし歌に惹かれて最上川舟に下りし日も遥かなり　千葉県　立川多喜子

茂吉が詠んだ最上川の歌に惹かれて舟下りをしたという。大石田よりさらに下った戸沢村の最上川であろうと思う。茂吉は多くの最上川の歌を詠んだがやはり心に残っているのは『白き山』の歌であろうか。

茂吉先生かつて立ちましし蓬来院の石段温し冬の日差しに　山形県　牧野　房

茂吉先生がかつて立たれた山形県南陽市の蓬来院を詠んだ歌である。下の句に作者の思いがこもる。昭和二十二年五月に蓬来院で茂吉先生をお招きして、置賜アララギ歌会が開かれた。

ふた国を結び通ひし峠路か茂吉の歌碑に偲ぶいにしへ　宮城県　皆川　二郎

笹谷峠の茂吉の歌碑を詠んだ歌である。「ふた国の生きのたづきのあひかよふこの峠路を愛しむわれは」という歌が刻まれている。この歌は、第十四歌集の『霜』に収められている。この峠は、山形県と宮城県を結ぶ最短のコースであり交流の重要な役割を果たしてきた。

賜りし記念館よりの翁草乾きし土にわづか芽の出づ　宮城県　宮城　公子

斎藤茂吉記念全国大会の日に、翁草の苗が希望者の皆様に配られた。作者はそれを庭に植えておいたのであろう。それが春になり、小さな芽を出してきた。作者のよろこびが伝わる。

冬の陽に温もる部屋の窓際に茂吉全集今日も読みつぐ　愛媛県　山上茂次郎

冬の日差しのなかで茂吉全集を読み継いでいる作者の姿と充足感の伝わる歌である。

斎藤茂吉のやうな後輩を是非育ててくれと口癖なりき曽祢武校長　東京都　吉村　睦人

作者は開成高校で教鞭をとっておられたので、校長から斎藤茂吉のような歌人を育ててくれとよく頼まれたのであろう。校長先生も短歌に親しみをもっていたし、良き理解者であったのであろうと思う。斎藤茂吉も開成中学の生徒であった。

それぞれの茂吉に関わる歌をみてきた。これらの歌を読むと茂吉の歌はいろいろな人達に影響を与えてきたことを改めて思わされる。そして、これらの歌により茂吉の歌の世界がさらに広がってゆくような気がする。これからも斎藤茂吉記念歌集は、発刊されてゆくであろうし、つづけて欲しいものである。そして、今後とも皆様のご協力をお願いしたいと思います。

■ぬのみや　まさあき　歌人・「新アララギ」「群山」・山形県歌人クラブ会長

左下から時計周りに、斎藤茂吉記念歌集、ジュニア短歌コンクール「桜実」、第55回記念茂吉忌合同歌会作品集

随想　茂吉二題

納　骨

茂吉先生は没後六十九年、七十年になろうとする今年、五月十五日の斎藤茂吉生誕記念の全国大会の墓前行事。年々宝泉寺で行われているが、とりわけ今年は厳粛なものとなった。本殿で例年の供養が終ったあと、庭つづきの墓群の中に茂吉の墓が立派に建てられている。その墓石を動かし骨壺が出され、新たに御骨数片を納める行事「埋骨式」がねんごろに執り行われたからである。

遺族の斎藤喜美子氏と斎藤由香氏

御骨は次男宗吉（北杜夫）さんが長年崇めまつっていたもので、北さん没後しばらくは書斎押し入れにしまわれていたそうで、数年前、記念館に茂吉・北さんなどの多くの遺品が寄贈されるにあたって、その整理を手伝った本館職員が御遺族の依頼を受けて預り、郷里山形（上山）の記念館を経由して宝泉寺にお預かりいただいていたものである。この日御遺族の喜美子夫人、長女由香さん、斎藤家の茂一さん御夫妻など、更に地元関係者らも揃っての納骨の日になったものである。

北さんはこの御骨数片をまつるための仏壇を買い求められ、おそらく日々供養をされておられたものと思われる。あるいは創作者としての苦悩などを父茂吉に訴えることもあったかもしれない、などと思った次第である。（この仏壇そのものは記念館内に保存・展示されている）

遺族の斎藤茂一氏と茂一夫人

私は現在の茂吉記念館館長、一歌人、一茂吉研究者、ひとりの人間として、今回の埋骨式に参加させていただき感慨無量である。この道を歩んで来て、本当に良かったとしみじみ思いながらも、この恩恵を大切にして以後の創作活動などをして参りたい。

＊＊＊＊＊

茂吉の実朝観

九月の十五夜の日に伊豆山神社にあつまって、明月を讃え、実朝を偲ぶ歌会に招かれ、歌を奉納する歌会に参加してきた。以前にも二度ほど招かれ参加していて、よく雨に煩わせられる会だが、今年は幸い晴天で満月も見ることができた。名月歌会に相応しい夜だった。

三度目ということもあるのか、短い講演も頼まれ、「茂吉の実朝観」について話したのでその要点を書いておきたい。

1　実朝について

源実朝は二十八歳の一月に没してしまっているから、本格的に和歌を学んだのは数年ぐらいである。しかし、

茂吉はその偉大さを全面的に認め大切にした。我が国の短歌史の中に大きな存在として位置付けている。凡俗の批評家は実朝の歌には本歌があるから、独創の歌人ではないという批評があるが、茂吉は万葉集をよく読み、独自性があると評価し認めている。

2　実朝の作品から（茂吉評の紹介　※参照：全集第九巻）

ながめつつおもふも悲し帰る雁ゆくらむかたの夕ぐれの空

「きさらぎの廿日あまりの程にや有りけん北むきのえんに立出て夕暮れの空をながめて一人をるに雁がなくを聞てよめる」の詞書。名詞止めなど新古今調であるが、しみじみと心を味わうことができる。実朝はうちに悲痛な心を蔵して、しかも自然の本質を眺め得た人で、一方では極めて巧妙な手腕を感じさせる作者でもある。

散のこる岸のやまぶき春深み此ひとえだをあはれといはん

「山吹の花折て人のもとへつかはすとて」という詞書のある歌。山吹の花のあはれ深い姿と作者がいかにも接近している。言葉を代えて言えば、作者が本当に感じて作った作であることが少し注意すればわかる。この歌の特徴はそこに存するのだと思う。

「あはれといはむ」と言う味わいのこもる言葉と「この」がいかに相響くか注意したい。

春ふかみあらしもいたく吹く宿はちりのこるべき花もなきかな

詞書「春のくれをよめる」。暮春の気持ちが説明的に感じられる。一首の哀韻がある。「あらしも」は「嵐の」と言うべきところである。

春過ぎて幾日（いくか）もあらねど我やどの池の藤なみうつろひにけり

小気の利いた歌をつくっているともがらは、この歌を平凡と言うであろうが、この歌の作者は上の空で歌を作っていない。それゆえ天然のいきいきとした再現と共に、その同化し尽くした作者の面影が彷彿として現れてくるのを味わうことができる。歌の良しあしは材料ではない。

ほととぎすきけども飽かず立花（たちばな）のはなちる里の五月雨の頃

平淡な作だが誦ずるに足る作である。杜鵑と橘と五月雨との調和した心持である。

ふく風の涼しくもあるかおのづから山（やま）の蟬（せみ）鳴きて秋は来にけり

「寒蟬鳴く」という題。貞享本には「吹く風は」となっている。「涼しくもあるか」は「涼しくあるかな」または「涼しくもあることかな」の意である。「おのづから」は自然にの意味であるが、早朝の響きある言葉で、日本語として特殊な味をもった言葉と思う。この歌の場合はいかんなくその特色を発揮して古今独歩であると思う。

雁なきて秋風さむくなりにけりひとりやねなむ夜の衣うすし

結句は「よるのころも」と訓む方がいいと思う。一首が純直でしかも張っていて、いい歌である。

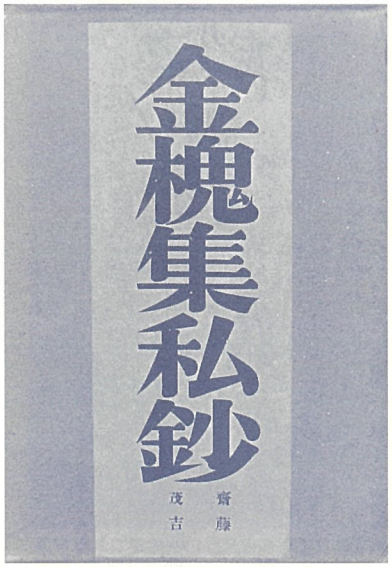
暮れかかるゆふべの空をながむればこだかき山に秋風ぞふく

何の奇もない歌であるが、大まかで心のままに詠っていて、そうして自然の相（すがた）がおのずから現れている。「眺むれば木高き」と続けたところが旨い。一首の葉っているところもここに原因している。

天の原ふりさけ見れば月清（つききよ）み秋の夜いたくふけにけるかな

平凡のようでありながら、一首の連続の具合微細な良い所がある。作歌するときの本心の緊張が伴うからである。古歌の句を踏襲していながら、その古歌に対する尊敬の念が切実であるため借り物の匂いが目立ってこない。

■秋葉　四郎（あきば　しろう）館長・歌人



茂吉が源実朝とその短歌についてまとめた「金槐集私鈔」（大正15年春陽堂）

斎藤茂吉の遺骨・埋骨式について（報告）

令和四年五月十五日(日)に開催した生誕一四〇年第四十八回斎藤茂吉記念全国大会の墓前行事に合わせて、斎藤茂吉の遺骨・埋骨式を執り行ったところですが、その実施に至る経緯と概況について報告いたします（敬称略）。

■斎藤茂吉の遺骨について

斎藤茂吉は、昭和二十八年二月二十五日に東京都新宿区大京町の自宅書斎にて心臓喘息により満七十歳九カ月で死去し、翌二十六日に東京大学病理学教室で解剖（執刀は三宅仁、介補は平福一郎）、二十八日には東京渋谷の幡ヶ谷火葬場で火葬後、骨つぼ二個に分骨されました。そして、同年三月二日に築地本願寺で葬儀・告別式が行われ、これ以後茂吉の遺骨は二つに別れます。

一つは同月五日に実弟の高橋四郎兵衛（山城屋主人）が山形県上山に持ち帰り、五月二十四日、郷里金瓶の宝泉寺（浄土宗）の茂吉の墓（茂吉自身が準備した竿石・茂吉の筆による「茂吉之墓」、裏面には「赤光院仁誉遊阿暁寂清居士」が刻まれる）前で分骨埋葬式が行われています。

もう一つの骨つぼの遺骨は、少しの間東京の茂吉の自宅に置かれた後、六月四日に青山墓地の茂吉の墓（宝泉寺と同じく茂吉筆によるもの）が建つ場所で埋骨式が行われ、親族・門人らによって納骨されました。その間、自宅に置かれていた遺骨を父とまだ一緒に居たい気持ちから、茂吉の次男斎藤宗吉（北杜夫）が幾つか持ち出すことになりますが、このことは、北杜夫『ある青春の日記』に記述され、さらに、茂吉の長男斎藤茂太・次男宗吉（北杜夫）の対談本『この父にして』にも、持ち出しからその後の保管などについて記述されています。

移動された茂吉の墓石と埋骨式の参列者

斎藤茂吉の墓については前述の二基と、後年、茂吉の弟子の結城哀草果が所持していた遺骨の納骨による山形県大石田町乗船寺の一基が加えられました。

■埋骨式に至る経緯について

北杜夫が長く持ち続けた斎藤茂吉の遺骨（数片）は、東京都世田谷区の北杜夫家自宅二階の書斎（押入れ）に保管されていた仏壇などとともに、令和二年十一月、斎藤茂吉記念館が受領しました。宝泉寺の境内に建つ茂吉の墓に、しかるべき日（斎藤茂吉記念全国大会墓前行事実施日）を定め埋骨することを前提に、一時的に宝泉寺に安置しました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により令和三年の第四十七回全国大会の開催中止に伴い、埋骨式も延期となりました。なお、遺骨とともに受領した仏壇などは宝泉寺住職による撥遣式（魂抜き）を行い、令和三年四月下旬から斎藤茂吉記念館内の茂吉晩年のコーナー（集会室）で展示しています。

■埋骨式について

埋骨式前日の令和四年五月十四日、午前八時三十分から宝泉寺住職により茂吉墓前にて埋骨のための墓

石移動に伴う撥遣式を行った後、地元石材店の作業員が小型重機を用いて、墓石（竿石および台座三基）の移動作業を行いました。台座がコンクリートで地面に接着されていたため、作業は難航したものの、台座の移動が完了した同日午後四時頃には、昭和二十八年五月に埋葬された骨つぼを漸く確認することが出来ました。台座の下には目測で縦横40㎝、深さ40㎝ほどの石の枡があり、その中央には直径20㎝、高さ20㎝ほどの陶製の円柱状の骨つぼが安置されていましたが、石の枡内の浸水は殆どなく、骨つぼの周囲には実弟の四郎兵衛が東京から上山に持ち帰った際に、骨つぼを収めていたと思われる木箱の破片の一部が残っていました。骨つぼの蓋は針金で固定され封印されていたようでしたが、腐食のため素手で容易に開封することができ、骨つぼ内の遺骨は複数の骨片のうえに、頭蓋骨と思われる遺骨が見受けられ、内部の浸水は殆ど無いようでした。確認後は、翌日の埋骨式まで、地元石材店が墓周辺を封印・養生してその日の作業は完了となりました。

埋骨前の読経をする宝泉寺住職

また、埋骨式に先立ち、マスコミおよび一般参列者の写真・映像の撮影については、今回埋骨する数片のみ許可し、骨つぼ内の撮影は禁止する事を寺住職の意向として確認し、当日注意喚起することとしました。

翌十五日、午前九時半から生誕一四〇年第四十八回斎藤茂吉記念全国大会墓前行事（読経、焼香、記念歌集の献上）を宝泉寺本堂で行った後、午前十時から宝泉寺境内の茂吉の墓前にて埋骨式を執り行いました。北杜夫の保管していた遺骨数片を以下の順序で埋骨しました。

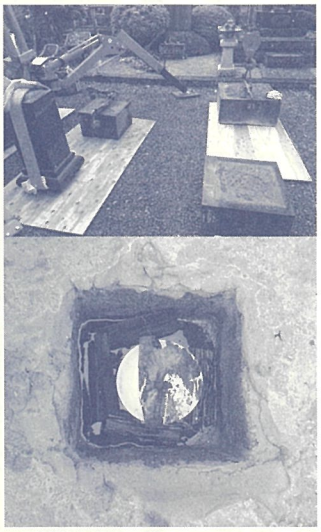
・斎藤茂一（斎藤茂太長男）と茂一夫人
・斎藤喜美子（北杜夫夫人）と斎藤由香（北杜夫長女）
・横戸長兵衛（全国大会主催者／上山市長）
・清野伸昭（全国大会主催者／当館代表理事）
・雁部貞夫（全国大会運営委員代表）
・秋葉四郎（当館館長・孫弟子）

その後は、その他関係者（参列者）が順次焼香を行いましたが、主な参列者は以下のとおりです。岡野弘彦（第三十三回斎藤茂吉短歌文学賞受賞者）、吉川宏志（大会記念講演講師）、横戸隆（上山市教育委員会教育長）、長澤長右衛門（上山市議会議長）、佐藤勘治（金瓶学校保存会会長）、長田康仁（金瓶地区会会長）、皆川二郎・大瀧保・布宮雅昭・鎌上純子（記念全国大会運営委員）、館職員。ほか、一般参列者二十名程とマスコミ各社の取材があり、参列者数は約五十名でした。

埋骨式終了後、その場で斎藤家遺族に対するマスコミ対応の時間を二十分程度設け、その後、墓石の移動作業により墓石周辺の原状回復を行いました。

令和二年十一月の遺骨受領当初より、斎藤茂太・北杜夫の両家ご遺族ならびに宝泉寺、茂吉生家の守谷家、地元関係者など多くの方々のご理解とご協力をいただき、埋骨式を執り行うことができました。このたびの埋骨式実施に際してご遺族とともに入念に準備を重ね、最大限の敬意を払いながら実施に至りましたが、今後も斎藤茂吉記念館はその顕彰に取り組みながら、改めて斎藤茂吉先生のご冥福を謹んでお祈り申しあげます。

■業務係主事兼学芸員　五十嵐善隆


上　小型重機で移動した墓石
下　石の桝と骨つぼ　骨つぼの上と周囲にある黒いものは木箱の破片

定例歌会 第21・22回

令和四年度講座事業として定例歌会（第二十一回＝六月十二日、第二十二回＝十一月十三日）を、歌歴や居住地に限定しない超結社の歌会として計画した。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、一堂に会する集会的な歌会を取りやめて、二十一回・二十二回ともに紙上歌会として開催した。以下各回の詳細は次の通り。

■第21回（紙上歌会）

六月に開催予定の第二十一回は、紙上歌会として六月上旬から八月上旬にかけて行った。

□紙上歌会の作品募集　（六月十日～六月二十四日）
□選歌と歌評のため歌会作品集（全投稿歌を無記名一覧化）を参加者に郵送　（七月一日）
□参加者は選歌と「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評を執筆し記念館に返送　（七月十五日）
□氏名入り作品一覧、選歌集計結果と各参加者の「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評、講師（秋葉四郎）の全歌評を掲載した「第二十一回定例歌会【紙上歌会】作品集」を発行　（八月九日付）
□「第二十一回定例歌会【紙上歌会】作品集」を参加者に郵送　（八月八日）

以下高得点作品と講師選作品紹介（敬称略）

＊互選一位／五位鷺の青田かすめて飛ぶ夕べ単線二両の電車過ぎゆく　富川　静枝
＊互選二位／功もなく名も成さざれど孫と来て山のいで湯に語りあう幸　沼沢　修
＊互選三位／こんなにも真っ赤な夕焼けこの地球を戦ひの炎の空にあらすな　佐藤　みち子
＊互選四位／海の砂踏めば素足が覚えてる朽ちた恋の詩君といた夏　山下　和枝
＊互選五位／村芝居鎮守の森に甦えり木洩れ日のもと白塗（しらぬ）りの顔　小川　邦昭
○秋葉四郎特選／蔵王嶺を借景として松生ふるわが家の庭に幼子遊ぶ　高橋　良
○秋葉四郎入選／駒姫の小さき墓は義光（よしあき）の娘思ひしいつも花あり　田口　きみ子
○秋葉四郎入選／名人にパットの極意教わりてグランドゴルフ楽しくプレイす　渡邉　智雄
○秋葉四郎入選／司法試験毎年つづけ受けし夫逝きて知りたり心のうごき　小林　あき
○秋葉四郎入選／海の砂踏めば素足が覚えてる朽ちた恋の詩君といた夏　山下　和枝

■第22回（紙上歌会）

十一月に開催予定の第二十二回は、紙上歌会として十月中旬から同年十二月下旬にかけて行った。

□紙上歌会の作品募集　（十月十四日～十一月一日）
□選歌と歌評のため歌会作品集（全投稿歌を無記名一覧化）を参加者に郵送　（十一月十一日）
□参加者は選歌と「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評を執筆し記念館に返送（十一月二十五日）
□氏名入り作品一覧、選歌集計結果と各参加者の「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評、講師（秋葉四郎）の全歌評を掲載した「第二十二回定例歌会【紙上歌会】作品集」を発行並びに参加者に郵送予定　（十二月下旬）

新型コロナウイルス感染拡大に伴う対応について

■新型コロナウイルスの感染拡大に伴う事業規模の縮小

□生誕一四〇年第四十八回斎藤茂吉記念全国大会（五月十五日）は当日午前中に、関係者のみ参列による墓前行事と埋骨式を行い、午後の記念鼎談と記念講演等を感染対策を講じて開催。来場者の検温と消毒、連絡票（感染者発覚後の通知利用を目的とした氏名と電話番号の記入・一定期間保存の後に破棄）の提出協力依頼、ソーシャルディスタンス確保のため座席数の制限等を行った。また、例年行っている弁当販売と記念レセプションを中止した。

■感染拡大防止策（前年度対策を見直しながら継続）

□入館受付に飛沫対策のアクリルパネルの設置
□入館料と物販の金銭授受はトレイ上で行う
□入館希望者に対する非接触体温計での検温を実施（三十七度以上の場合は、入館をご遠慮いただく）
□マスク着用と手のひら消毒の協力依頼（消毒用アルコール等を設置し、マスク不所持の場合は必要数を提供）
□入館者に対する氏名・住所等を含む連絡票の提出協力依頼（感染者発覚後の通知利用を目的とし、一定期間保存の後に破棄）
□受付、館内ベンチ、キッズサロン、集会室内等にソーシャルディスタンスの掲示
□ドアノブ、連絡票記入台、記入用鉛筆等の適宜消毒作業実施

収蔵資料から
－渡辺幸造宛書簡－

近年、渡辺幸造宛書簡二十七点が寄贈された。これらは全て『斎藤茂吉全集』未収載の資料であり、記されている内容の一部読解が進んだため、書簡からうかがえることを紹介する。

渡辺幸造（筆名＝草童）は、明治十五年神奈川県の農家の生まれで、開成中学校時代から短歌・俳句を作り、「アララギ」入会前の茂吉に文学的影響を与えた。成績優秀であったが病気により開成中学校を中退、郷里に戻り後に金田興業銀行の常務となった。茂吉とは開成中学校の同級生で、地方出身同士親交を深めた。幸造が中退をした後の二人の交友は書簡のやり取りが中心であったため、茂吉が幸造に宛てた書簡は多く存在している。

茂吉は開成中学校卒業後、第一高等学校在学中に正岡子規の遺稿集『竹の里歌』を読んで感銘を受け本格的に作歌活動を行うようになる。そして、「ある時『僕は近ごろ歌を作りはじめた。そして根岸派の歌流である』といふやうな意味の手紙をやつた。さうすると草童君は非常に賛成してそして僕のうたを批評し或るものは褒めて呉れた。ここではじめて僕は自分の指導者を得たやうな心持になつて、歌稿を送つて批評してもらふ。新刊のアシビを送つて分からないところを説明してもらふといふ風であつた。草童君の指導によつて僕の目は少しづつ開いて来た」と幸造の指導によって短歌への開眼があったことを茂吉は「思い出す事ども」のなかで述べている。茂吉は幸造に対して「君に見て貰ひ善いときは誉めて戴き悪しきときは御叱正を願ふ、これが楽しみに御座候」と明治三十八年五月六日の手紙で伝えており、対する幸造も、藤岡武雄『斎藤茂吉伝』にある日記によれば「茂吉君の手紙、よくも僕の歌を罵られた手紙、実に有難い、これほど、うれしい有難い手紙になに故猛然たる心おこらでやは」と記していることから、互いに歌を作り送っては批評し合うことを楽しんでいるように見える。

さて、歌稿や批評を書き送っていた二人であるが、今回寄贈された全集未収載書簡二十七点の内、茂吉が短歌を記し幸造へ送った葉書二点について詳細を見ていく。

まずは明治四十年八月九日、二十五歳の茂吉が伊豆へ海水浴に行った折に幸造へ宛てた絵葉書である。葉書の表面と裏面に一首ずつ歌が記されている。

表面
みちのくの山べにゆかず伊豆のくに戸田の荒磯に
蟹をたぬしぬ

裏面
まばらひげいやのびにのびこの日ごろ潮をあみつつ
妹もおもはず

表面の「みちのくの―」の歌は、幸造に対してのみ示され、「荒磯」「蟹」といった単語は後述する歌群の中の歌に使い直している。茂吉はこの一首を不出来の作品とみなしたようで、新聞「日本」に投稿した歌群に含めず、『斎藤茂吉全集』に収載されることもなかった。一方、裏面の「まばらひげ―」の歌は、幸造に示した後に結句を「妹もおもはず」から「思ふことなし」に変更して新聞「日本」へ投稿。明治四十一年四月十九日に掲載され、多くの読者の目に触れることとなった。また、全集には「短歌拾遺」に「漫吟（日本四月十九日、六首中一首赤光）」として収載された。茂吉における「妹」とは、後に「をさな妻」と称される許嫁の斎藤輝子のことであろう。

次に、消印より明治四十一年十月六日と推定される絵葉書を見ていく。「昨日散歩にまゐり候。よい景色に御座候つき歌なし」という本文の後に歌の草稿が記されている。

平らかに清くながれて玉川のながれ止まずも～。

結句にふさわしい良い言葉が浮ばなかったのだろうか、未完成の状態で幸造に葉書を送っている。茂吉が完成していない歌を送るということは珍しく、未完成の歌を送ることができる程の間柄であったことを裏付けている。※二枚の葉書は本紙表紙の画像を参照のこと

改めて二人の交流について述べたい。本格的に作歌活動を行うようになった茂吉が自身の作った短歌を最初に送ったのは、同級生であり開成中学校の時から作歌をしていた友人の幸造であった。茂吉は幸造との歌や批評を交えた文通の中で短歌の目が開き、「指導者」を得た心地になる。その後、茂吉が文通という一対一の閉じられた場から、新聞や短歌会のような開かれた場に短歌を投歌するようになると、幸造との書簡では短歌に関する内容が次第に少なくなり、ついには歌のやりとりも批評も行われなくなった。徐々に少なくなってゆくそれらより、茂吉にとって幸造が「指導者」から友人に戻ったことがうかがえる。そして、茂吉の歌に関する相談相手が多くなるにつれて、幸造との書簡のやり取りは減少していった。

しかし二人の交流が途絶えることはなく、茂吉は幸造に精神科医としての自身の心境を書き送り、長崎への赴任や欧州留学の際には近況報告などを記して送った。また、青山医院の再建時には金銭面の相談をしている。茂吉は幸造を大切な友人として敬意をはらい、晩年までその付き合いは続いた。

なお、明治四十年八月九日の絵葉書は、現在開催している斎藤茂吉生誕一四〇年特別展「若き日の斎藤茂吉－上山から東京へ－」（そして医学者茂吉、長崎・海外へ向かう）に展示している。

■業務係学芸員　佐藤結子

短信（掲示板）

◆講座事業　定例歌会（第21、22回）

記念館の周知・誘客と短歌の普及と実作の向上、さらに歌壇の発展等を目的とした超結社の歌会形式で、継続事業として二回計画／第二十一回＝新型コロナウイルスの影響により紙上歌会として令和四年六月十日（金）から同年八月九日（火）にかけて開催し、歌評を掲載した作品集を発行・投稿歌数四十五首／第二十二回＝同様に紙上歌会として令和四年十月十四日（金）から同年十二月下旬にかけて開催（歌評を掲載する作品集を発行予定・投稿歌数五十七首）

※詳細は本紙十二ページに掲載

◆特別展

◇「収蔵資料展―斎藤茂吉、新たな魅力の発見―」

近年寄贈を受けた新資料と日頃から展示する機会が比較的少ない資料を中心に、斎藤茂吉の日常生活と作歌活動、親しい人たちとの関わりからうかがえる新しい魅力を紹介／会期＝令和四年四月二十九日（金）から同年八月三十日（火）

◇生誕一四〇年「若き日の斎藤茂吉―上山から東京へ―（そして医学者茂吉、長崎・海外に向かう）」

斎藤茂吉の生誕一四〇年にあたり、上山に生れて幼くして上京した茂吉が斎藤家の一員となり、やがて青年期に至り医学者へと成長するまでの様子と、その時の心情などを表した作品・資料を紹介／会期＝令和四年九月十六日（金）から令和五年三月三十一日（金）

◆広報・教育普及活動等

◇「世界の蔵王プロジェクト」におけるユニバーサルツーリズムへの協力について

山形県は、蔵王地域及び山形市・上山市を対象エリアとして、四季を通じた通年型の観光地としての確立を目指す「世界の蔵王プロジェクト　持続可能な観光推進事業」を、（株）地球の歩き方に業務を委託し推進しています。同プロジェクトの一環で、高齢者や障がい者など、誰もが楽しめる観光（ユニバーサルツーリズム）を普及促進することを目的として、十一月十二～十四日の二泊三日の日程でモニターツアーが実施され、担当者と車椅子ユーザーらが来館し、館内のバリアフリーについて意見交換をしました。

◇DVD販売とオンラインツアー（有料特別配信）について

動画配信サイト「Vimeo（ヴィメオ）」にて配信している秋葉館長の解説と一緒にオンラインで巡る約五十分間の動画「秋葉四郎館長が語る　斎藤茂吉ものがたり　その魅力、その偉大さ」のDVDの販売を開始しました。DVD特典には入館ペアチケット（期限付き）。また、オンライン配信を無期限延長しました。／DVD（特典込）価格＝一〇〇〇円（税込）・オンライン視聴料：六〇〇円（税込）

◆斎藤茂吉記念全国大会事業見直しについて

八月二十九日、十月十八日に第五十一回以降の斎藤茂吉記念全国大会事業の見直しについて運営委員、主催者間で意見交換を行いました。次年度は関連団体とともに協議を重ねていくことを確認しました。

◆編集後記

本紙二十五号のため、さいとうなおこ・永田和宏・布宮雅昭の三氏より玉稿を頂戴しました。諸氏のご協力に厚く御礼申しあげます。本年は斎藤茂吉生誕一四〇年にあたり、遅延おりました斎藤茂吉の遺骨の埋骨式を無事に執り行う事が出来ました。また、茂吉研究の向上につながるきわめて重要な資料と作品の寄贈・寄託がありました。これは茂吉の遺族・親族をはじめとする関係各位のご厚意によるもので、大変有難く存じます。

（編集担当＝五十嵐）

ふるさと納税

上山市ふるさと納税制度のご活用による控除が受けられます。また、斎藤茂吉記念館提供によるオリジナルグッズの返礼品があります。

上山市ふるさと納税　検索

「友の会」ご入会・「活動支援募金」のご案内

●友の会

友の会会費は、当財団が実施する公益目的事業全般の充実等に活用します。

◎賛助・維持会員（対象：個人・法人・団体）
　年会費1口10,000円（会員証で10名まで無料入館）
◎一般会員（対象：個人）
○蔵王会員　年会費1口5,000円（会員証で5名まで無料入館）
○最上川会員　年会費1口3,000円（会員証で3名まで無料入館）
○学生会員　年会費1口1,000円（会員証で本人のみ無料入館）
　※友の会は入会日より1年間有効です。

●活動支援募金

活動支援募金に対する寄付金は資料の修復、複製資料の製作や記念館の設備更新等費用の一部として活用します。

○法人・団体等　1口10,000円
○個人　1口　5,000円

※「友の会・活動支援募金」とも、何口でも結構です。
※ご入会・ご寄付ご希望の方は当館までお問い合わせください。

◆利用案内
◇開館時間　9：00～17：00（入館受付16：45まで）
◇休館日　毎週水曜日（祝日・休日の場合は翌日）
　7月第2週の7日間・12月28日～翌年1月3日
◇入館料　一般：大人600円・学生300円・小人100円
　団体：大人500円・学生250円・小人50円
　※学生：高・大学生　小人：小・中学生
　※団体10名様以上 ※障がい者割引（団体料金適用）
◇音声ガイド300円（英語版有）

◆交通案内
◇お車でお越しの方（※無料駐車場有：普通車70台／大型車5台）
　・東北中央自動車かみのやま温泉I.C.から市内方面20分
◇電車でお越しの方
　・JR奥羽本線「かみのやま温泉駅」からタクシー10分
　・JR奥羽本線「茂吉記念館前駅」下車徒歩3分

館報「茂吉記念館だより－生誕140年記念－」第25号■発行／令和4(2022)年12月15日■発行人／秋葉四郎■編集・発行／公益財団法人斎藤茂吉記念館 〒999-3101 山形県上山市北町字弁天1421 tel.023-672-7227 fax.023-672-2626 URL https://www.mokichi.or.jp ■印刷／株式会社上山印刷